

《書評論文》

不可視を可視化することは可能か

—— Louise Revell, *Roman Imperialism and Local Identities*¹⁾

の方法論をめぐって ——

野 崎 由利子

Ⅰ エビデンス：文献学的証拠と考古学的証拠

1. 不可視のエビデンスをどう扱うか

歴史学者や考古学者にとって一番悩ましい問題は、エビデンスの有無であろう。歴史学者は自説を組み立てる上で文献資料を主に論拠とするが、典拠とすべき文献が存在しなければその説を立てることができないし、もし史料なしに自説を主張すれば科学的研究とは言えない。考古学者も同様で、考古資料なしになにかの歴史について議論することは不可能である。しかしながら、歴史的証拠は完全に揃っていることは稀で、ましてや千年、二千年以上前のことを考察しようという古代史においては、史料がある方が珍しいのが一般的と言えよう。

とりわけ古代人の思想や心情といった心の中を知ろうとすると、状況はさらに厳しくなるのは当然のことである。それでも、古代の歴史はこれらを抜きに読み解くことはできない。古代人が生活を営み、ある種の集団を形成し、その集団の中でなんらかの規範や規律に則って行動していた背景には、古代人の個人的、あるいは集合的な考えがあったに違いない。それは現代のそれと類似していることもあれば、全くかけ離れていることもあろう。古代史の研究者は何らかの方法で古代人の思想や概念を再構築する必要があるが、それは抽象的であるため、エビデンスが残りにくい。確かに文献に書かれていることもあろうが、そもそもその思想の前提になるものが現代人のそれと全く同一とは限らないため、研究者が無意識に、自身の時代の理念や価値観を投影する危険性もある。歴史学者や考古学者はごく僅かな証拠や、別の証拠から類推していくほかはないのである。

考古学の分野では、伝統的な方法論に批判的なニュー・アーケオロジーの学者たちが、上記の課題をのりこえるための努力を払っており、実証主義考古学における物質の分析中心の方法に対して、考古遺物を、それを作った人々と彼らが生活した社会を理解するための、意味をもった対象として考えるプロセス考古学、またこの手法の前提となる進化主義的視点を批判して、人間の個別の思考に重きを置くポスト・プロセス考古学が生まれた。またイアン・ホダーは、出来事の行為者にとっての主観的意味を明らかにしようとするコンテキスト

考古学を提唱した²⁾。さらにコリン・レンフルーらが中心となり、1990年代に論文の表題にもなった認知考古学が、この課題への新しいアプローチとして注目されている。「製作物からどれだけ人間の認識に接近できるか」³⁾を研究するこのアプローチには多くの考古学者が参加しており、レンフルーらはTAG (Theoretical Archaeology Group) を組織して大会を開いている。その他にエージェンシーの概念も考古学に導入され、その結果、「変化を引き起こす要因としての個人の役割」⁴⁾も議論の対象となってきた。

このような考古学の分野での新しいアプローチの手法に対して、歴史学の分野はどのように応えていくべきであろうか。本稿が扱うサウサンプトン大学の考古学者ルイズ・レヴェルが、学位論文を元にして2009年に上梓した著作 *Roman Imperialism and Local Identities* は、imperialism と Romanization というローマ史研究では頻繁に使われるにもかかわらず、エビデンスがあいまいな概念をいかにして考古資料から読み解くかを主題にしている。レヴェルはニュー・アーケオロジの方法論を援用して、この考え方が内包する矛盾を解く試みを行っており、歴史学者にとっても有益な示唆を与えているように思える。本稿のII以下でこの書の解説をするが、それに入る前にまず、imperialism と Romanization の問題点を簡単に再確認しておきたい。

2. imperialism と Romanization

E. ハヴァフィールドは、その支配下で平和がまれに見るほど長続したこと、そしてその優位な文化を文化的により劣った地域（特に西方）に広め、その文明化を促し、多少の地域性は残しつつも帝国の均質化を図ったことが、ローマ帝国 (the Empire) の功績である⁵⁾と主張した。彼の帝国前提 (imperialism) のローマ化 (Romanization) の概念は、後に「ポスト帝国主義」世代の学者たちから「帝国主義」的と批判されることとなる。しかしローマ帝国内では実際、どこでもラテン語が通じ、辺境の都市においてすらフォルム・神殿・公共浴場・円形闘技場・劇場といった施設が、規模の大小を問わなければ、存在しており、帝国内を旅する人はどの都市においても、ローマ市に居るがごとき生活を送ることができたのも事実である。ローマ時代のブリテン島を研究したE. ハヴァフィールドは、このRomanizationは各地の都市のエリートが中心になって進められたと考えた⁶⁾。

ハヴァフィールド以降の学者たちの間での論点は、ローマ文明と原住民の関係をどう捉えるかに絞られよう。ローマの支配によって持ち込まれた文化に対して、原住民の抵抗があったという主張がある一方⁷⁾、同じローマ時代のブリテン島の研究者 M. ミレットは、ローマに征服された土地のエリートが、先ずローマ文化を受容して、非エリートとの差別化を図ったために、Romanizationが進んだ、またそれが浸透すると、エリート同士の競合により、ローマ文化の多様な発現がなされたと主張した⁸⁾。つまり、地方でのローマ文明の受容は帝国側からの一方的押し付けではなく、原住民側の事情による積極的受容もあったとする。

このように、たとえ同じ文献資料や考古資料を分析しても決定的なエビデンスが存在しな

いかぎり、様々な解釈がなされてしまうのである。また、Romanization という用語では、帝国全体が統一的な文化に覆われたというような印象を与えるが、ローマ文化は実際には、各地で多少異なった発現のしかたをしており、統一か地方性かというパラドックスも内包している。

ところで古代の歴史研究でもう一つ、古代人の目には見えていたはずなのに、その存在がエビデンスとして現れにくいために、研究対象から外されがちなものがある。一般人の存在である。レヴェルも著書の中で、この問題を論じているので、以下で少し検討してみよう。

3. エビデンスから消えた人々

古代ローマ人が日常生活をどのように送り、その中で物事をどのように考え、感じたかはエビデンスが極めて少ないか、全く存在しないと言ってよかろう。もちろんキケロ、セネカ、小ブリニウスといった文人が遺した多数の書簡の中には、彼らの日常の行動が描かれていたり、心情が吐露されたりしているものがあるので、これをもとに古代ローマ人の行動や思考や感情を推察することは可能である。しかし彼らはローマ社会の中の1パーセントにも満たない富裕なエリート層に属する男性であるから、彼らの行動ないし物の見方や感じ方をそのまま、社会を構成する他の人々（庶民男性・女性・子供・奴隷など）に敷衍することはできない。しかも文字資料として現存するのは、この1パーセントの中の僅かな数の人々の記録の、そのまた一部分だけであるから、古代ローマ社会に生きた大多数の人々の日々の過ごし方や考え方とか感情の記録は皆無に等しいのである。

では、歴史はエビデンスがなければ存在しないことになるのか？一般庶民が生きて多様な場面で活動し、日々、種々の物事に心を動かした事実は、否定されるべきものであろうか？本稿の冒頭でエビデンスの希薄な研究はあり得ない、と述べたことはここにもあてはまるのか？

歴史の解釈に「心性」という概念が取り入れられて久しいが、古代ローマ研究においては、上記のような史料的事情から心性に関する研究は、やはりキケロなど、特権階級の文字を使って記録を残すことができる男性に関するものに偏っているようである。しかし彼らが記した文書の行間を注意深く読むと、エビデンスが欠如している非エリート層の人々の生活や心情が垣間見えてくるかもしれない。また文字史料には残りにくい人々の言動を、絵画や彫刻その他の考古遺物から読み解くことはできないのであろうか⁹⁾。

レヴェルは本書で、属州各地の都市の公共建築物や碑文というエビデンスを検証することで、その都市で経験される日常生活の再構築を試みる。そして、エリートの関与が明確なエビデンスに具体的に現れていないという不在性こそ、一般民衆の存在を意味し、彼らも社会的エージェントとして Romanization という抽象的な概念の受容と構築に関与していたことがわかる、と結論づける。

では著者が以上の問題点の論証をするためにとった手法を次に見てみよう。

II レヴェルの方法論

1. Romanization の再解釈

本書の序文で著者は、Romanization という言葉は従来、属州が様々な文化の変化を経験した先に到達した、属州同士の、或いは属州内の理想的な同一性を意味した¹⁰⁾と定義する。先行研究も、この変化が起こったメカニズムをエビデンスの中に捉え、同一化に向かう過程を検証するものが多く、属州の共同体の中の多様性を扱ったものは少なかった。しかし本書の中心的課題は、人々がローマ社会の中で生活し、日常のレベルで作用しあうとはどういうことかである。この視点から、ローマ社会に共通する要素と、同時に存在する相違点を検証する¹¹⁾と、Romanization という用語は、ローマ文化による静的で不変の一元性・均質性をもはや意味なくなり、物質文化、時間的拡がり、地理的位置、個人の民族性など多くの解釈を可能とする言説となる¹²⁾。ローマ帝国の構造に内在する同質性と多様性というパラドックスは、このように認識されるべきである¹³⁾と著者は述べる。

2. エージェント理論

著者は、Romanization をミレットと同様、属州都市のエリート層が率先してローマ文化を受容したものとする。しかし、それは帝国側からの押し付けによる受動的なものだけではなく、また都市の非エリート層も Romanization に何らかの関与をした、ということ立証する。そのために援用された手法は、社会学者 A. ギデンズのエージェンシーの概念と構造化理論である。著者によると、ギデンズは、社会構造と個人の生活とは二項対立的に見られるものではなく、分離不可能であり、むしろ相互依存的である¹⁴⁾と考えている。社会構造は、社会的エージェントとその行為の枠を構築し、エージェントの日常生活に適正なふるまいの範囲を提供する。一方これらの日常的な行為は習慣として実行され、社会構造を、さらには究極的に社会システムそのものを再生産する¹⁵⁾と言う。

建築物はそれを使用する人々と、その中で行われる活動によって意味を与えられる。一方人々は日常の活動を通して人生の意味を理解し、自己のアイデンティティーを確立していくが、それは建築物という環境の中で行われることが多い。公共建築物の中に Romanization を表現するメッセージが書き込まれていると、そこで日常の経験をする住民がそれを読み取り、規範とする。だが、メッセージの解釈は各個人の社会的地位や性の差によって変動する。従って、建築物と人々がどのように相互作用したか研究することは、Romanization という概念が内包する均質性と多様性というパラドックスを探る上で、意義あるものになる、と著者は言う¹⁶⁾。なお碑文は、このようなアプローチの補強的役割を持つ。碑文からは、ある場所で行われた活動や、人々が顕彰するのにふさわしいと考えた行為、また人々が意味あるものと判断した社会構造について探ることができるからである¹⁷⁾。

3. ケーススタディ

著者は、以上のような手法で、帝国内の属州から選んだ都市と呼べる場所に建てられた公共建築物および碑文を、第2章では「都市性」、第3章では「皇帝」、第4章では「宗教」、第5章では「社会的地位」という主題から考察していくのだが、それらの都市は以下の通りである。

属州 Baetica の Colonia Aelia Augusta Italica (Italica) と Municipium Flavium Muniguense (Munigua), 属州 Hispania Tarraconensis の Colonia Clunia Sulpicia (Clunia) と Municipium Augusta Bilbilis (Bilbilis), Roman Britain の Londinium (London), Venta Silurum (Caerwent), Viroconium Cornoviorum (Wroxeter) と Aquae Sulis (Bath)。() 内は現在の地名。

これらの都市は、公共建築物内で行われた日常生活を再構築するために、充分発掘調査がなされていること、また多様な都市のサンプルとなるように大小様々な都市であることという基準から選ばれた¹⁸⁾。また、時代区分を、ローマによる征服活動が完了し、文化的変化の過程を目に見える形で表せるようになった、紀元後2世紀後半に設定した¹⁹⁾。そして、帝国内で共通に見られる都市性、皇帝のイメージ、宗教行為といったイデオロギーと、公共建築物、及びそこで経験される人々の日常生活との関連を探る。それらのイデオロギーは、ある種の社会的、政治的活動に枠をはめるが、一方で、住民の日常的行為によってそれが再生産されていることも明らかにする²⁰⁾。このことが、属州における Romanization の同質性と、同時に多様性・多層性を生成したと、著者は述べる。

各都市の主だった特徴を挙げてみよう。(第5章「社会的地位」は帝国全体から論じられているように思われるので、別の項で解説する。)例えば Italica では、トラヤヌス、ハドリアヌス両帝と関係が深かったため大規模で豪華な建物が建っており、歴代皇帝の像が並び、皇帝崇拜も盛んである。皇帝に関する碑文も多数存在して、ローマ都市の典型的な見本のようであるが、詳細に見ていくと、最重要神殿は円形闘技場に近く、宗教と見世物の関連をうかがわせる。また、神殿では足裏絵 *plantae pedum* という呪詛札がネメシスに奉納されているが、イシスやセラピスに捧げられている他の地中海都市のそれとは異なっており、特徴的である。Munigua では、都市の公共建物の大部分が宗教施設であり、最重要神殿は、3段テラス構造を持つ。Bilbilis では、他のスペインのローマ都市とは異なり碑文が少なく、また神殿と劇場が隣接しているのが特徴である。Roman Britain の各都市に共通するのは、碑文の存在が希薄であることと、Bath 以外では神殿や宗教施設がほとんどみられないことである。Bath では、犠牲式や灌奠といったローマで一般的な宗教儀式的他、水中にコインや呪詛札が投げ込まれていたり、小祭壇が個人によって奉納されていたりすることから、同地の神殿に祀られている地元の水の女神 Sulis とローマの女神 Minerva は、個人の願いや祈りを聞き届けてくれる存在であった、と推察される。

これらの都市では、エリートがフォルム、神殿、円形闘技場、公共浴場などの公共建築物を建築・維持したり、碑文を立てたり（或いは碑文で顕彰される対象になったり）して、都

市における Romanization のイデオロギーの積極的なエージェントとなった。碑文には都市に関係した事柄を記したものや、有力者の恵与行為を顕彰したものなどの他に、帝国への奉獻碑文もあり、都市が自治権を与えられていても、実際は帝国と密接な関係にあることを見せつけていた。一方、非エリートは彼らなりの「読む」能力を使って、都市内に設置された建物・碑文・彫像に込められた象徴的なメッセージ—帝国、皇帝—を、自己のものとした。都市とそこで行われる日常の慣習を通して、彼らも、都市の Romanization を再生産し維持する役割を担った。

上に挙げたケーススタディで、同じ属州内の都市間でも見出された特徴的な差異は、各都市でエリート層とその他の民衆が、それぞれの立場から Romanization を再生産した表れである。Romanization は、完全に同一で画一的とは言えないのである。

4. 「社会的地位」一見えざる人々が関与する Romanization

著者は各都市の公共建築物の比較検討から、ローマという共通のアイデンティティーの言説が都市の建築物の中に埋め込まれていること、ローマの権威が都市共同体内で再生産されることを考察した。この結果、全体的にはある共通性が見られるが、都市ごとに Romanization の発現のありように差異が発見された²¹⁾。さて、都市には様々な個人が居住し、彼らは社会的エージェントとして公共建築物で経験する日常生活により、Roman-ness（ローマ人らしさ）を再生産するが、彼らの中にある差異—年齢・性・社会的地位—がそれに反映される²²⁾。しかしローマ社会は、自由身分の成人男性エリートが最も強い力を有しているので、未成年・女性・非エリート・貧民・奴隷といった人々はその対極に置かれてしまう。従来のローマ考古学者は、特権階級の経験をローマ人の行動のパラダイムとしてきた²³⁾。著者はこれに対し、公共建物内での富裕な成人男性の社会経験を検討することで、その対極にいる人々の自己認識が、特権階級の言説が提供する状況によっていかに形成・維持されたかを考察する²⁴⁾。

例えば政治的建築物として curia（都市参事会）や tribunal（法務官席）が挙げられる。これらは豪華な造りであったり、一段高く造られていたり、特権階級のための空間として、バシリカの一般人が立ち入る場所とは区別されていた。Caerwent のように床下暖房を設置したものもあった。この都市と Wroxeter では、参事会員や帝国から派遣された法務官が、民衆の集まっているバシリカを通らずにその席へ出入りができる特別の通路が存在した。London や Clunia では、そのような工夫がなかったため、民衆が納得できない裁決を下したような法務官は、バシリカを通して退出する際、民衆の怒りの矢面に立たされたことが想像される。宗教的建物では、エリートは神官として、儀式や祭事には特殊な服装をまとい、特別の用具を持つことで、一般人との差異を強調した。また神殿や宗教施設を寄進した。しかし、富裕な女性や解放奴隷が、神官職に就いたり宗教施設を寄進したりする例も見られる。女性は犠牲式を執り行うことができなかったが、解放奴隷は *seviri Augustales*（皇帝崇拜六神官団）

として、政務官が着るような *togata praetexta* を着用し、犠牲式を執り行った例もある。

娯楽用建築物の円形闘技場や劇場に関しては、都市のエリートはそれらを建設したりその中で見世物を催したりして都市に寄与した。円形闘技場では身分により席が決められていたことがスペインやブリタニアで確認されている。公共浴場は都市の中心に位置することが多いが、それはこの場所が特権階級にとって、社会的・政治的ネットワークを作り出すのに不可欠であったためである。しかし女性は利用できたとしても、時間が異なっていた。またここで働く多数の奴隷は、別の通路を使うなど、利用者の目に触れないように巧妙に隠されていた。ここでも男性特権階級が社会構造の基準となっていることが看取される。さらに、都市を政治的中心とする要素である碑文慣習も、女性や解放奴隷が恵与行為を行ったことを記念する少数の碑文を除き、やはりエリートである成人男性が建てた例が多い。

III 可視化に向けて

著者は、「ローマ人のアイデンティティーという唯一のものは存在しなかった。そのかわり、重層的な経験が作り出される可能性をもった、〈Roman-ness ローマ人らしさ〉という言説があった。この言説はただ一つの社会構造に根ざすものではなく、物質文化の一つの形態で表現されるものでもない。ローマの imperialism は多面的で、その力は幾多のイデオロギーの形態と、重層的な状況の中に存在した」²⁵⁾と結論する。従来、帝国—属州、征服者—被征服者、ローマ文化（優等）—原住民の文化（劣等）などと二項対立的に論ぜられることが多かった Romanization の概念が、実は多面的で重層的であることを、考古資料である都市の建築物から読み取ろうとしたのが本書であった。著者の検証は、具体的な建築物を通して抽象的な概念を実証できることを明らかにした。

しかし、本書に問題点がないわけではない。一番大きな難点と思われる点は、第5章「社会的地位」である。属州の都市における地域性や地方性については既にあまたの研究がある²⁶⁾。だが、住民がどのように自分たちのアイデンティティーを意識したかは、これまであまり注目されてこなかった。この点の追及が本書の重要な意図であったはずであるが、結果として、あいまいに終わったように思われる。特に、E.J. グラハムの書評の指摘のように、特権階級との差異を強調するあまり、女性や奴隷を男性特権階級の対極に据えてしまった²⁷⁾ことは、二項対立を避ける著者の立脚点と矛盾していると言えよう。また住民は、それぞれ特色のある都市で日常の経験をしているのであるから、その生活習慣も地域によって異なっているはずである。しかし、円形闘技場の階級別の座席区分とか、公共浴場の構造やそこでの人々の行動など、ローマ市のことについて書かれた文献資料の確認を、ケーススタディの都市で行うことに終始してしまった。考古資料の制約があったのかもしれないが、著者の分析が不十分であったことが惜しまれる²⁸⁾。

全体として、本書は imperialism や Romanization を主題にしているため、都市の住民がそ

れらを自明のこととして受け止め、そこから自己のアイデンティティーを作り出していった、ということを基調にしている。だが、このような住民意識の画一的なとらえ方に、違和感を覚える。都市のエリートが自分たちの権益や特権を守るために積極的にローマ文化を取り入れた、という説を是認したとしても、一般庶民は果たして、著者が主張するほど日常的に、ローマ帝国や皇帝の存在を明確に意識したり容認したりしていたであろうか。不可視のイデオロギーを公共建築物の中に可視化するために、著者は史料的には不可視である人々の存在に着目したが、その扱いはやはり imperialism とエリート中心主義のパラダイムに則ってしまったように見える。グラハムはその書評で、家庭や経済や葬儀などの場面での人々の経験も視野に含むと良いのでは、という提案をしている²⁹⁾。

ケーススタディでは、ガリアの都市がなぜ含まれなかったのか、疑問に思う。ガリアは都市化が早い時期に始まったので、本書のケーススタディの時代設定には含まれないかもしれない。しかし、ローマ文化が比較的深く浸透したと考えられがちなガリアでも、地域や都市で差異や特徴が見られる³⁰⁾。本書の扱う都市と比較対照することで、著者が主張するローマ化の多面性と多重性を、より鮮明に浮き上がらせることができたのではないだろうか。

しかしながら、不可視のものを可視化しようとした著者の試みは、方法論の点で評価されるべきであり、歴史学者が学び取ることが多い。冒頭でも述べた通り、古代史は考古資料や文献資料が限定されており、その解釈も確定できているものは少ない。古代史自体が不可視なのである。けれども、従来の概念や手法を踏襲するのではなく、新しい視座から常にそれらを見直す態度が必要であろう。そして他分野・多分野の学問の知見や手法の大胆な援用と活用で、可視化は可能ではないかと考える³¹⁾。

註

- 1) Louise Revell, *Roman Imperialism and Local Identities*, New York, 2010, Pp. xvi+217.
- 2) 安斎正人「現代考古学の認識論—理論考古学と歴史・哲学—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』13 (1995), 16.
- 3) 同, 26.
- 4) コリン・レンフルー, ポール・バーン『考古学—理論・方法・実践—』(監修・訳者: 池田裕, 常木晃, 三宅裕, 訳者: 松本建速, 前田修) 東京, 2007, 501.
- 5) F Haverfield, *The Romanization of Roman Britain*, Clarendon, 1915, 10-13.
- 6) *Ibid.*, 14.
- 7) 南川高志『海のかなたのローマ帝国: 古代ローマとブリテン島』東京, 2004, 50.
- 8) Martin Millett, *The Romanization of Britain: An Essay in Archaeological Interpretation*, Cambridge, 1990, 212.
- 9) 墓碑の銘文から故人の生涯を復元する研究は既に多数ある。例えば、ローレンス・ケッビー『碑文から見た古代ローマ生活誌』(小林雅夫・梶田知志訳, 東京, 2006) 参照。またロバート・クナツ『古代ローマの庶民たち—歴史からこぼれ落ちた人々の生活—』(西村昌洋監訳, 増永理考・山下孝輔訳, 東京, 2015) や Anthony Birley, *Garrison Life at Vindolanda: A Band of Brothers*, Gloucestershire, 2002 など非エリートに目を向けた研究も盛んになってきている。
- 10) Revell, *op.cit.*, ix.
- 11) *Ibid.*, x.

- 12) *Ibid.*, x.
- 13) *Ibid.*, 2.
- 14) *Ibid.*, 10. レヴェルがここで参照しているのは, Anthony Giddens, *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*, London, 1984, 25。
- 15) Revell, *op. cit.*, 10, Giddens, *op. cit.*, 60.
- 16) Revell, *op. cit.*, 10.
- 17) *Ibid.*, 22.
- 18) *Ibid.*, 26.
- 19) *Ibid.*, 25.
- 20) *Ibid.*, 54.
- 21) *Ibid.*, 150.
- 22) *Ibid.*, 150.
- 23) *Ibid.*, 152.
- 24) *Ibid.*, 153.
- 25) *Ibid.*, 193.
- 26) 例えば Woolf, G., *Becoming Roman: The Origins of Provincial Civilization in Gaul*, Cambridge, 2000
や Brather, Sebastian, 'Acculturation and Ethnogenesis along the Frontier: Rome and the Ancient
Germans in an Archaeological Perspective', Florin Curta ed., *Borders, Barriers, and Ethnogenesis:
Frontiers in Late Antiquity and the Middle Ages*, Turnhout, 2005. またブリタニアについては Joan P.
Alcock, *A Brief History of Roman Britain: Conquest and Civilization*, London, 2011 など。
- 27) Emma-Jayne Graham による本書の書評 (Bryn Mawr Classical Review 2009.8.66) <http://bmcr.brynmawr.edu/2009/2009-08-66.html> 最終閲覧 2015 年 11 月 18 日。
- 28) アウグストゥス帝と同時代の建築家ウィトルウィウスは、その著作『建築書』の神殿建築に関する章で、ある種の外柱の間隔は欠陥がある、と言う。なぜなら、「主婦たちが祈願をこめるために段を登る際、一列になるのであれば、一団となつては柱間をはいることができない」(『ウィトルウィウス建築書』森田慶一訳、秦野：東海大学出版会、2004、第三書第三章 3) からだ。利用者の利便性も、設計上考慮すべきなのである。また、神殿、フォルム、劇場といった公共建築物を建てる際には、その土地の気候や地形や用途に応じて、臨機応変に対処すべきであることを、繰り返し述べている。建築家は帝国各地の Romanization を担ったと考えられるが、彼らがウィトルウィウスの方針を共有して、各地で公共建築物を建てていたとすれば、地元民の関与以外にも、地方による差異が生じる原因となった可能性がある。
- 29) レヴェル自身、ローマ社会における女性の存在と立場についての小論文で、風景・入植地・宗教・経済を再解釈することで女性・こども・奴隷といった社会の周縁部に追いやられた人々をローマ考古学の範囲に引き戻すことができる。それができて初めてローマ帝国の社会考古学を語ることができる、と述べている。Louise Revell, 'Romanization: A Feminine Critique', Moore, A., Taylor, G., Harris, E., Girdwood, P., and Shipley, L. eds., *TRAC (Theoretical Roman Archaeology Conference) 2009*, 1~10. <http://soton.academia.edu/LouiseRevell> 最終閲覧 2015 年 11 月 18 日。
- 30) ガリアの都市化とその地域的特徴の考古学的・社会学的考察については、Woolf の前掲書、及び Penelope J. Goodman, *The Roman City and Its Periphery: From Rome to Gaul*, Oxon & New York, 2007 参照。
- 31) ギデンズの構造化理論は、既に歴史研究の手法として広く用いられている。例えば、Clifford Ando がその著 *Imperial Ideology and Provincial Loyalty in the Roman Empire*, London, 2000 で、全体の基調として援用している。同書 xiii, 及び 24 参照。

